平成十四年三月

蟹江町歴史民俗資料館

年報

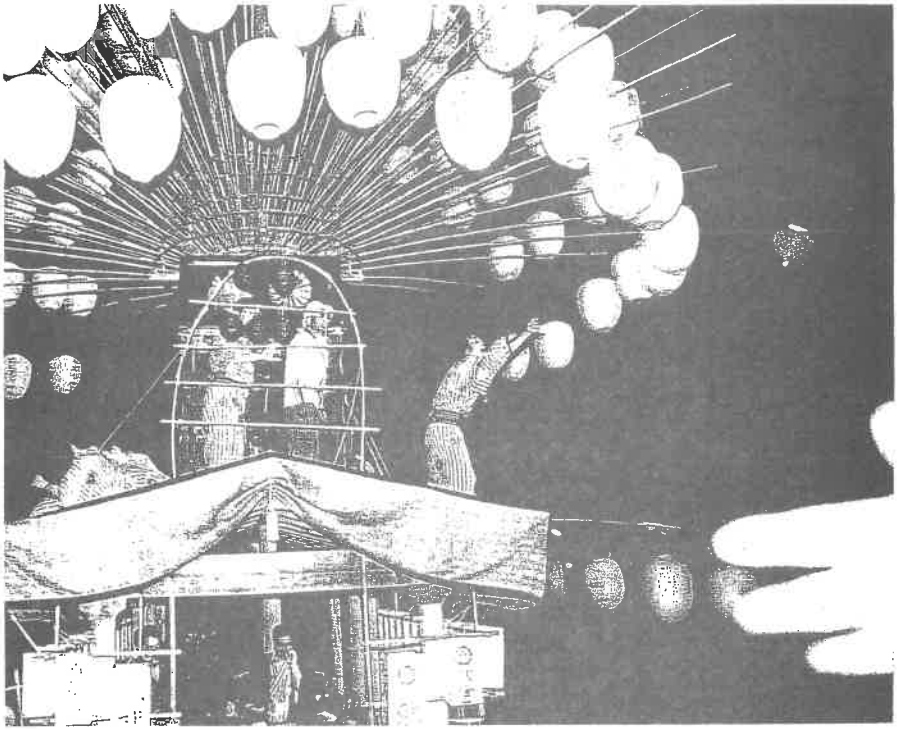
第二十二冊

目次

一　「沿革誌」より……1
二　事業概要……2
三　資料の収集・保管……3
四　展　示……11
五　調査・研究……15
六　情報提供……17
七　教育普及……18
八　庶務報告……39
九　文化財保護……41

蟹江町歴史民俗資料館特別展示

「投げる」



須成祭宵祭　撮影：加藤俊男氏

期間　平成１２年１１月４日(土)～１２月３日(日)
　　午前９時～午後５時　　月曜・祝日休館
場所　蟹江町産業文化会館　　企画展示室
主催　蟹江町生涯学習課
入場　無料

開催にあたって

一般に「投げる」という言葉を聞くと、”さじを投げる”、”投げやり”とも言うように、何かをあきらめるとか、ぞんざいに扱うなどの意味でとらえられることが多く、あまりいい意味にとられなかったりします。

ところが、祭や何かの節目の儀礼では、餅や菓子などを投げる行事が意外と多く存在します。その場合を見てみると、投げられる物は縁起物であり、投げられた物を受け取った人には良いことが訪れるという言い伝えがあるのが大半であることに気づきます。
今回の特別展では、蟹江町を中心に行われる物を「投げる」行事を中心に関連資料を展示し、そこにはどんな意味が込められているのかを展示をとおして紹介したいと思います。

今回の特別展開催にあたり、須成文化財保護委員会の方々、加藤俊男氏を始め、たくさんの方に展示の趣旨をご理解いただき、多大なるご尽力、ご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げ、感謝の意を表します。

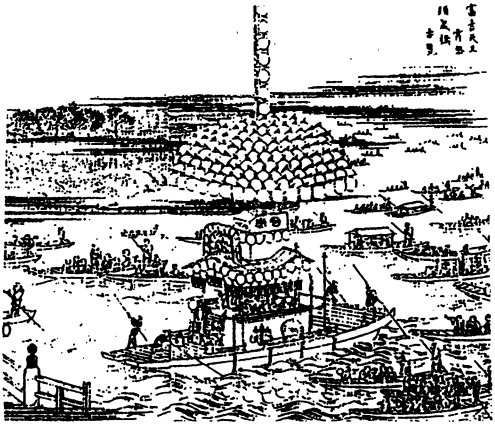
＊なお、この展示では、「投げる」の解釈として、広辞苑の「①手に持って遠くへ放る」にならって、手の届かない距離の所へ向けて物を手放す行動としてとらえさせていただきました。したがって、「投げる」ではなく、「ほうる」とか「まく」という言葉の方がふさわしい場合もあるかとは存じますが、ここでは「投げる」という表現の解釈をさせていただき、紹介させていただくこととといたしましたことをご了解下さい。

平成１２年１１月吉日

蟹江町歴史民俗資料館

1　須成祭

蟹江町須成にある冨吉建速神社・八剱社の祭礼である須成祭は宵祭が８月の第１土曜日、朝祭が翌日の日曜日に行われ、美しい川祭として知られています。朝祭の一週間前に行われる葭刈と朝祭・宵祭は愛知県の無形民俗文化財に指定されていますがいづれの祭事においても、「投げる」行事がつきものになっています。



尾張名所図絵附録
「冨吉天王宵祭須成橋古覧」

葭 刈

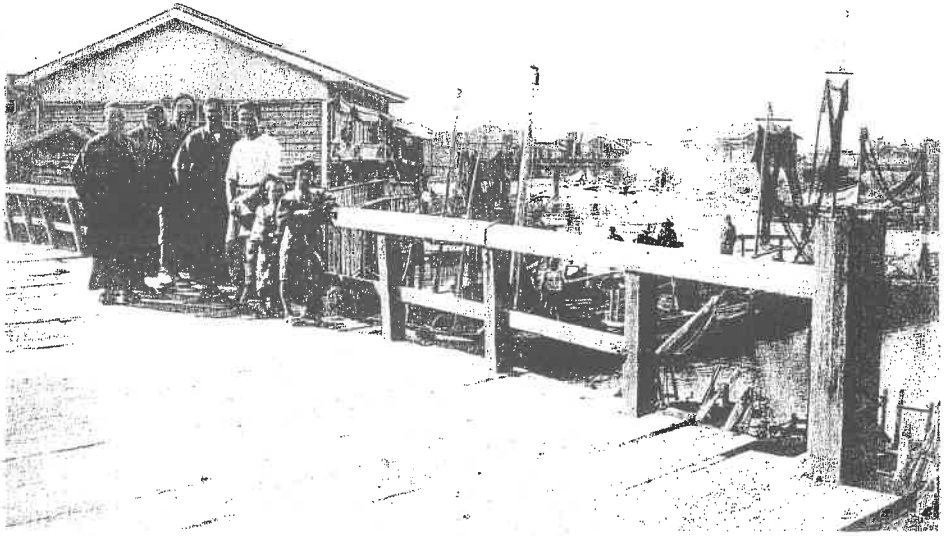
葭刈は、祭の際に神様のよりしろとなる葭を刈りに行く行事です。その年成人式を迎えた若者の中から選ばれた葭刈役が白装束を身にまとって葭刈船に乗り蟹江川を下り葭刈場に向かい、葭を刈って来るのです。この時、葭刈役は、真菰で編んだ縄の先にもちをはさんだちまきを投げながら川を下っていきます。このちまきを受け取り食すと夏病みしないと言われています。

葭刈船の上で鳴らす太鼓の音が聞こえて来るとその地域の人たちが、ちまきを拾おうと集まってきます。このちまきは、蟹江川を下っていく際、川沿いの地域の人への挨拶の意味もあるのかもしれません。

撮影：加藤俊男氏

蟹江町歴史民俗資料館特別展

川のなかの生活文化



１９３０年代（昭和初期）の蟹江漁港　―　漁業組合事務所～魚河岸橋周辺　―

開催日時　平成１３年１月２７日（土）～２月２５日（日）
午前９時～午後５時
毎週月曜日・２月１１日（日）は休館日

開催場所　蟹江町産業文化会館　企画展示室等
蟹江町大字今字蟹江浦２３－４番地
電話：（０５６７９）５－３８１２

主　催　蟹江町教育委員会生涯学習課
入　場　無料

特別展開催にあたり

現在、地図帳をふと眺めると「川」が直線的に描かれています。しかし２００年、３００年と時代をさかのぼって地図をみれば、どこにも現在のような川は描かれてはいません。これは時代とともに上流の水を少しでも速く海に流そうとする人々により手が加えられた結果であり、大きな川から順次中小河川へと改修が行われた結果“川”はいつしか“直線的な構造物”であることが当たり前ということになりました。

流れが変化しただけでなく、現代社会において、「川」の持つイメージもとても単調的な存在になったのではないしょうか。ただ町の中を水が流れていくだけのものとして、または、私たちの生活とのかかわりを遮断するフェンスが張り巡らされ、地域社会の財産を脅かす存在として、ゴミや排水を流す生活の後始末をするだけのものと成り果てたのではないでしょうか。

古来から“流域”と呼び慣わされているように、「川」は常に地域の人々の生活と密接な関係にあったはずです。

例えば「川」の恵みにより生活を営み、上下流間では物流だけではなく、婚姻など多くの生活交流が行われた歴史があります。そして「川」を境に国だけではなく方言、生活習慣、食生活などが異なることもあり、まさに「川」は地域における生活領域にかかわる文化的、社会的な存在であって、日々バラバラである地域の人々の価値観をまとめる役割をも担う存在（信仰・行事等）でもありました。

「川離れ」といわれる現代社会において、近年少しずつでありますが環境や都市計画の分野で「川」への回帰を図る活動が行われようとしています。

今回の特別展は、壮大な「川」が持つほんの一部分でありますが、その中で人と川とのかかわり、そして自然環境に対する問題の提起をテーマに蟹江町内の河川だけではなく、木曽川や庄内川という当町の生活に関係の深い“流域”を中心として、「過去から現在、未来への川と地域社会」を考察してみたいと思います。

なお、関係各位には今回展示開催にあたり、同館の開催趣旨をご理解いただき、多大なるご尽力、ご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成１３年　１月　吉日　　蟹江町歴史民俗資料館

1　川のなかの治水史

海抜０メートル地帯にあるこの地方の人々にとって、川を治めるということは、人命と財産を守る上で非常に重要なことであり、古くから治世者によりさまざまな河川の改修が行われてきました。

古くは、豊臣秀吉による木曽川築堤事業、尾張藩における御囲堤の造営などが代表的な河川改修事業としてあげられます。

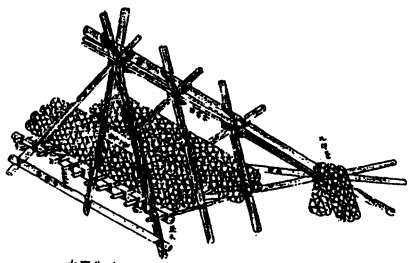
安土桃山時代から江戸時代初期にかけてのこの河川改修事業の多くは、領国を外敵から守るという軍事的、政治的な側面から推し進められる場合が多く、利根川や大和川の改修事業も、やはり政治的色彩の強い事業であったとされています。

しかし、江戸中期以降の河川改修は、むしろ経済性を優先したものが多くなったとされ、船による交易・交通の円滑化を図り、大河川はもちろん中小河川の港への交通路確保のために、または新田開発及び「輪中」という低湿地地帯における排水を容易に行うための新川掘削など、河川改修は、各藩にとって経済力を強化するための投資的な事業として各地で盛んに実施され、当地方においても、蟹江川改修（万治年間）や日光川・福田川・新川掘削事業などが行われることとなりました。

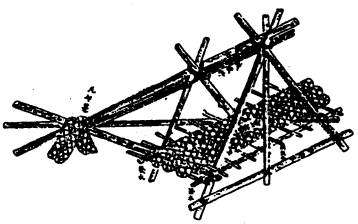
大河川木曽川水系においても宝暦年間に、幕府の命令により、薩摩藩による治水事業が行われたことはあまりにも有名です。

しかし、河川を改修するには、それに見合うような技術を必要としています。その多くは戦国時代から江戸時代に使用された築城の技術が応用されているということです。

現代社会においても多くの事例がありますが、いわば軍事技術の平和利用ということでした。しかし、この河川技術も多くの場合、「秘伝」として内密に特定の者しか利用できないものであったようです。



大型牛（いのこ）「土木工要録」



大川倉　「土木工要録」